

プレハーノフ生誕150年国際会議

坂本 博／相田利雄

- 1 この国際会議への参加のいきさつとサンクト・ペテルブルグの印象
- 2 プレハーノフ生誕150年国際会議

1 この国際会議への参加のいきさつとサンクト・ペテルブルグの印象

2006年12月11日―12日に開かれたプレハーノフ生誕150周年国際会議に、相田利雄（大原社研所長）と坂本博（プレハーノフの研究者、大原社研嘱託研究員）が参加して報告を行なった。

坂本がこの国際会議に参加するのは、かれの専門分野、特にこれまでのプレハーノフ文書館との交流からして、当然のことである。しかし、相田がこの会議に出席した経緯については、少し説明が必要である。

2005年12月17日に大原社研主催の国際シンポジウム「日本とロシア 戦争の100年，平和の150年」が市ヶ谷キャンパスのBTで開催された。その記録は、本誌の574・575（2006年9月10月）に掲載されている。この国際シンポジウムに、大原社研はロシアのプレハーノフ文書館館長であるフィリモノヴァ女史をシンポジストとして招待した。また、坂本博もこのシンポジウムのシンポジストであった。

シンポジウムの後、相田は、フィリモノヴァさんとソク・ファジョンさん（国際シンポジウムのもう1人の招待者、韓国の研究者）に、わざわざ多摩キャンパスの大原社研に来て頂いて、その書庫を案内した。フィリモノヴァさんは、大原社研の書庫にロシアの古い辞典やロシア語の文献それにソ連時代のポスターが沢山あることに興味を示した。その後、フィリモノヴァさん、ソク・ファジョンさん、坂本氏、それに相田の4人が多摩キャンパスの百周年記念館で宿泊することとなった。われわれ日本人は、学生時代からロシア民謡をよく歌った。そこで、4人で沢山のロシア民謡を合唱することと相成った。

こうした経過の中で、フィリモノヴァさんは、相田に来年（2006年）12月に開催されるプレハーノフ生誕記念国際会議に出席して報告をしないかと熱心に誘ってくれた。実は、相田は初めには

*本稿は、1を相田利雄、2を坂本博がそれぞれ分担執筆した。

この誘いに対してhesitateした。プレハーノフについては、学生時代に『歴史における個人の役割』を読んだことがあるが、それ以外にほとんど詳しい知識がなかったからである。また、冬のロシアの寒さに耐えられるかどうかにも自信がなかった。しかし、フィリモノヴァさんは、hesitateする相田に、「日本における経済発展と社会運動」というテーマで発表すればよいと言って、再度国際会議への参加を要請した。これを受けて、相田は会議への参加を決意した。

テーマに関しては、幸いにも大原社研編（1999）『日本の労働組合100年』旬報社が中心的な参考文献であった。この書は、明治維新以降の年代を追って、個々の労働運動、社会運動等を項目別に、その背景や影響も含めて詳しく書かれている。当時の大原社研の研究者を中心にそれ以外の歴史研究者も含めて、この分野の専門家が執筆した労作である。相田は、この文献に依拠していることを明記した上で、いくつかの項目をピックアップし、また、それ以外の歴史家の歴史書も参考にすることができた。そしてこれらを英訳し、プレハーノフ国際会議のpaperを準備した。

冬のロシア行きに備えて、アウトドアの用具店で、下着、帽子、手袋等を買そろえ、ロシアに持って行った。ところが、ロシアは137年前に気象観測が始まってから初めての暖冬（平均気温8度）であり、雪さえ見ることができなかった。冬には咲かない花が咲き、偏西風で海水が入り込んできたために運河の水位が上昇していた。寒さに凍えることが避けられてラッキーであった。しかし、雪国の長野県松本市外波田村（当時）に育った相田には、雪の中を歩くことを楽しみにしていただけにアンラッキーでもあった。もっとも、ロシア行き用にそろえた防具は、日本に帰ってから寒い日には役立てている。

われわれは、国際会議の会場であるプレハーノフ文書館のあるサンクト・ペテルブルグに向かっ



プレハーノフ生誕150年国際会議（シンポジウム）

た。そして、その町にあるロシアナショナル図書館のゲストルームに泊めさせてもらった。瀟洒な部屋で寝心地がよかった。ただ、お風呂はなく、シャワーもお湯がぬるく、かつ時間によってはそのお湯も出なかった。3泊という短い期間であり、当地はウエットな気候でなかったのも、余り苦にはならなかったのであるが。

国際会議は、12月11日、12日の2日間（午前10時—午後5時）であったが、その催し物の一環に、excursion が含まれていた。10日には、プレハーノフの墓参り、エカテリーナ宮殿の見学、ロシアナショナル図書館本館の見学が生まれ、12日の夜には、オペラ鑑賞が組まれていた。

プレハーノフの墓参りで印象的なのは、墓地がさびれていたことである。聞いたことによれば、彼をはじめ、帝政ロシアの体制の中で主流にならなかった人たちの墓は、このさびれた墓地にあるという。真偽のほどはわからないが、ついでに言えば、ツルゲーネフ、レーニンのご母堂の墓もここにあった。

エカテリーナ宮殿は、琥珀の間でよく知られている。その部屋の前と後に金箔の大部屋、小部屋、輝く天井壁画、燭台等があった。旧・ロシア帝国の威厳と支配の一端を見ることができた。他の部屋では写真を撮ることが許されたが、琥珀の間ではそれが禁止されていた。どうやら撮影を許可する場合には特別な撮影料を取ろうという魂胆のようである。

ナショナル図書館の見学は3時間に及んだ。いくつか印象的なことを記す。

所蔵物は書籍類のほか地図、ポスターなどを含めて3100万点。レセプションやカタログを見たが、いずれも威厳があった。アラビアの古文字の書いてある石、西欧各国の図書（古文書も含む）とそれを説明するためにつくられたの特別ボックス、ゲーテンベルク時代の古書を集めた「ファウストの間」、ポスター類の展示など、各展示室が見事に整えられていた。ヴォルテール館は特別の専門的な説明者がヴォルテールとエカテリーナ2世との友人関係、当時のロシアとフランスを含めたヨーロッパの国際関係などについて、熱く語ってくれた。ナショナル図書館の見学は、まるで博物館を見るようなわくわくした見学であった。

国際会議初日には宿舎のナショナル図書館から会場のプレハーノフ文書館まで30分余り歩いた。9時半頃—10時頃であったが、朝焼けが何とも言えないほどきれいであった。

すれ違う人々は、みんな早歩きだ。寒いからかあるいはベテルブルグのロシア人は背が高く足が長いからか。どうも両方の気がした。

狭い門をくぐると、プレハーノフ文書館は2階建てであった。会場にあたる2階会議室は小さな部屋であった。真ん中に丸テーブルがあり、その周りに14—15人が座る。後の参加者は丸テーブルの両サイドの後ろにある椅子に1列6—7人ごとに数列をなして座る。テーブルの横にも10人余が座る。こうして、総計70人余が会議に参加した。

参加者は、プレハーノフのレリーフが飾ってある場所か、自分の席か、どちらかで起立して報告した。会場が小さいこともあって、かつ報告者は個性が強い人が多く、熱気に満ちた報告とディスカッションが展開された。英語で報告する外国からの参加者には、英語をロシア語に通訳する通訳が付いた。中国からの参加者は英語でなく中国語で報告する人もいたが、その場合は中国語→英語→ロシア語という2重通訳がなされた。坂本氏は、会議の一部始終をビデオカメラにおさめた。相田も訪口直前に買ったデジタルカメラで会議の模様を撮影した。



ブレハーノフの墓まいり

エルミタージュ美術館の夜景は、クリスマスのイルミネーションも飾られて美しかった。ネヴァ川の橋の上から見たエルミタージュ美術館も印象深い。

食事所で印象的だったのは、坂本氏に連れて行ってもらった「文学カフェ」（いわゆる、プーシキン喫茶店）である。ここは、詩人プーシキンがよく通り、妻ナターシャを巡っての決闘に向かう前にも立ち寄ったカフェである。品位のある食事所であり、ピアノの生演奏とテノールの独唱を聴きながらロシア式スープ等を楽しんだ。

国際会議が終了してから、ロシアオペラを鑑賞した。小さな劇場なのでかえって、間近に歌手たちの歌と演劇を見ることができた。ヨーロッパに近いここペテルブルグは、冬のエンターテインメントとしてオペラが盛んだという。

なお、相田は、法政大学大原社会問題研究所を紹介するために、会議の参加者たちに英語版の大原社研紹介パンフを配布した。また、フィリモノヴァさんからは、ベレストロイカ以降の政治・経済に関する資料を贈呈してもらった。

最後になるがわれわれを招待して頂いたフィリモノヴァさんとこの国際会議で知り合ったナショナル図書館館長ザイツェフ氏、『歴史アーカイブ』誌編集長チェルノバーエフ氏をはじめ何人かの研究者たち、それに我々の世話をして頂いたナショナル図書館のオーリャさん、ブレハーノフ文書館のインガさん、マリーナさんに心から感謝の意を表したい。

2 プレハーノフ生誕150年国際会議

プレハーノフ生誕150年国際会議は、「プレハーノフの思想的・理論的遺産と現代社会」というテーマで、プレハーノフの誕生日である12月11日と翌12日の2日間、サンクト・ペテルブルグのプレハーノフ文書館ホールで開催された。これに先立ってプレハーノフの郷里であるリーベツク（モスクワの南500km）では12月5日に記念行事があり、首都モスクワでは労働組合会館円柱の間で9日に記念の会議が開かれた。そして国際会議前日の10日にはペテルブルグのヴォルコヴォ墓地にあるプレハーノフの墓に100人近くの市民が集り、献花が行われた。

国際会議はプレハーノフ文書館館長フィリモノヴァ女史の司会の下、ロシア・ナショナル図書館館長ザイツェフ氏の開会の辞とともに始まった。2日間にロシアと外国からの計22人が報告者となり、討論が行われた。外国の報告者のうち、プレハーノフの伝記の著者として知られるアメリカのパロン氏は、健康上の理由で欠席し、その代わりに送り届けられた「プレハーノフと東洋的専制主義の概念」という報告が代読された。日本からは相田と坂本の2人、中国からは社会科学院哲学研究所の2人と人民大学社会発展研究センターの1人が参加した。ヨーロッパからはドイツ、イタリア、ギリシアの研究者の報告があった。

ザイツェフ氏とロシア科学アカデミー会員ヴィシニャコフ氏の挨拶の後、『歴史アーカイブ』誌編集長チェルノバーエフ氏から同誌の第6号としてプレハーノフ生誕150年の特集号が組まれたことが報告された。この号にはプレハーノフの伝記資料や彼の手稿などが収められているが、その中には大原研究所所蔵の片山潜の未刊著作『在露三年』が一部訳出されている。また、その解説には大原研究所の沿革も紹介されている。

相田の報告「日本における経済発展と社会運動」では、さらに詳細な研究所の歴史が紹介された。また戦後の研究所の出版活動について説明があった。次に報告者は明治憲法下の政治体制と労働組合の状態に言及し、日清戦争後、資本主義の進展にともなって労働争議が頻発するなか、1897年に労働組合期成会が結成されるにいたったことを述べた。また、この運動に果たした片山潜の役割が語られ、日露戦争中の第二インターナショナル（於：アムステルダム）におけるプレハーノフとの握手を含めた彼の略歴が紹介された。また、片山潜が1933年にモスクワで死亡したことも紹介された。そして1912年に結成された友愛会が、1919年に大日本労働総同盟へ転換し、1922年に日本共産党が結成されるという状況のなかで1925年に治安維持法が制定されたことが説明された。この法律が当時の労働運動だけではなく、以後のリベラルな立場からの反戦運動をも抑圧する結果になったというのが、報告の結論であった。報告に対して会場から、なぜ現在の日本では労働運動が低迷しているのかという質問があったが、それに対して報告者は、日本では経営者の労務管理が進んでおり、また日本の労働組合に左派が少数だからだと回答した。

坂本の報告「セルゲイ・プラトノフの本におけるプレハーノフの書き込みについて」はプレハーノフ研究の方法論に関するものであった。その要旨は次の通り。プレハーノフによる蔵書への書き込みがプレハーノフ研究にとって重要であることは、すでにプレハーノフ文書館の研究員ブローニナ女史がその博士候補論文で述べている。今回の報告では歴史家セルゲイ・プラトノフの本へ

の書き込みについて考察する。セルゲイ・プラトーフは17世紀初頭のロシアの動乱に関する著書の中で、1610年2月4日にモスクワの貴族とポーランドとの間で結ばれたロシア皇帝の権限を制限する条約は、政治改革を目指すものではなく、貴族の旧来の特権を確保しようとする保守的な性格のものであったと論じている。この見解に関するプレハーノフの書き込みと読書ノートは、彼の考えがプラトーフの見解と一致していたことを示している。ところが、1925年に出版されたリャザーノフの編集によるプレハーノフ著作集第20巻では、当該のプレハーノフの記述が「どうしてもプラトーフ教授に同意できない」となっている。これは誤植で、「どうしてもプラトーフ教授に同意せざるをえない」となるべきであろう。以上のように述べた後、報告者は結論として、プレハーノフによる蔵書への書き込みが、プレハーノフ研究の資料のなかでまだ手付かずになっている領域であることを指摘した。

中国の報告者たちのテーマはそれぞれ「プレハーノフの史的唯物論」、「プレハーノフの史的唯物論の貢献と現代中国における調和のとれた社会の建設」と「中国におけるプレハーノフ」で、いずれもプレハーノフの史的唯物論に注目していたところが印象的であった。現在、改革開放政策を推進している中国において、生産力を重視するプレハーノフの史的唯物論が注目されていることは興味深い。

現代のロシアの状況を反映しているという意味で注目されたのは、ペテルブルグ航空機器製造大学教授のスマルノーヴァ女史の報告「現代ロシアにおける愛国主義の問題」であった。彼女は愛国主義のあり方として民族主義ではなく、ロシア文化あるいはロシア文明というべきものに立脚すべきだと主張した。彼女の説明によると、ロシア文明はスラブ文化だけではなく、フィン・ウゴル文化とチュルク文化との3要素に基づいていた。このように彼女が民族主義を排し、歴史的に形成されたロシア文明に立脚する愛国主義を提唱する背景には、ロシア国内の民族問題、特にチェチェン問題があるように思われる。ロシアから分離独立しようとする少数民族の動きを、どのように食い止め、国内に統合するかという問題意識がここにはある。この報告には反発する参加者もいて、激しい議論が巻き起こった。ギリシアのサヴァス・マツァス氏は、現代ロシアにおける愛国主義は新たな全体主義に論拠を与えるものだと主張した。また、ロシア文化は偉大であり、それに誇りをもっているという報告者の発言に対して、若い参加者からエルミタージュ美術館にあるフランス絵画には誇りをもつのかという皮肉っぽい質問が出される一幕もあった。

翌11日にはロシア科学アカデミー歴史研究所ペテルブルグ支部のポトーロフ氏の報告「19世紀末-20世紀初頭の労働運動」があった。彼はこの時期の労働運動研究の基本的な資料集としてシリーズ『ロシアの労働運動 1895年-1917年2月』を紹介した。これはモスクワの歴史研究所のプシカリョーヴァ女史が中心となって出版しているもので、1895年の資料を集めた第1巻が1992年に出されてから、現在まで十数巻に及んでいる。報告者の説明によると、これは旧ソ連の殆んどすべての古文書館、博物館の協力を得て編纂された包括的な資料集である。彼は報告の結びで、革命前のロシアの労働運動を研究するアメリカの若い研究者たちへの期待を表明していたが、これは裏返すとこの分野でのロシアの若い研究者が少ないということだろう。

公共事業アカデミー助教授のヴェルバ氏は、プレハーノフの最後の日々について印象深い報告を行った。報告者は、プレハーノフがボリシェヴィキ政権による搜索や肺結核の悪化によって1918年

1月にフィンランドのサナトリウムに移らざるを得なかったこと、新政権のドイツとの講和の動きを危惧していたこと、病状の悪化にもかかわらず、それを心配する妻のロザリヤを反対に激励しようとしたことなどを語った。彼はプレハーノフの最期を非常に共感を込めて語り、言葉が途切れがちになった。彼は、我々はレーニンやスターリンについて多くのことを知っているが、プレハーノフについても同じく知るべきであると報告を結んだ。

モスクワ大学のブズガーリン教授は「現代の社会・哲学問題の解決に対するポスト・ソビエト時代のマルクス主義の科学的寄与」という報告の冒頭で、1956年のプレハーノフ生誕100年の会議ではプレハーノフはレーニンと同じマルクス主義者とされたが、50年後のプレハーノフ生誕150年のモスクワでの会議ではプレハーノフはレーニンとは立場を異にすることが強調されたと語った。報告者によれば、プレハーノフは民主主義者であった点で、一党独裁に向かったレーニンとは違っていた。しかし、革命家としてのプレハーノフの評価に関しては、報告者は判断を保留する。十月革命の段階で戦争の続行を主張し、内戦を避けよと主張したプレハーノフと、内戦の危険を顧みず、ドイツとの単独講和に踏み切ったレーニンとでは、どちらが正しかったのかと報告者は問題を提起する。だが、これは複雑な問題だとして、その答えは示されなかった。報告の結論としては、時代の変遷とともに、マルクス主義は常に再検討を加えられなければならないということであった。

紙幅の関係ですべての報告を紹介することはできなかった。プレハーノフ文書館では3年ごとにプレハーノフ研究会を開いているが、最近の2005年5月の研究会では、その直前に年金受給者のデモなどがあって、社会変革への熱気のみなぎっていた。それに比べると今回の国際会議はずっと落ち着いた雰囲気であった。現在のロシア社会が政治的にも経済的にも少しずつ安定に向かっていることが、プレハーノフの思想的遺産をより冷静に捉え直すことを可能にさせているように思われる。

(さかもと・ひろし 大原社会問題研究所嘱託研究員)

(あいだ・としお 法政大学大原社会問題研究所所長, 社会学部教授)

[付]

プレハーノフ生誕150年国際会議プログラム

主催：ロシア科学アカデミー、ロシア・ナショナル図書館プレハーノフ文書館、プレハーノフ基金

会議の名称：国際学術会議「プレハーノフの思想的・理論的遺産と現代世界」

日程：2006年12月10-12日

場所：ロシア・サンクト・ペテルブルグ

12月10日

10:15 ヴォルコヴォ墓地でのプレハーノフの墓への献花

12月11日

10:00 開会

開会の辞 ロシアナショナル図書館館長B.H.ザイツェフ

挨拶 ロシア科学アカデミー会員B.C.ヴィシニャコフ

1. A.A.チェルノバーエフ（モスクワ）プレハーノフの業績についての最新の文献資料
2. B.B.カラーシニコフ（ペテルブルグ）プレハーノフと歴史理論の若干の問題
3. Л.А.ブラーフカ（モスクワ）文化と歴史：プレハーノフの文献遺産のアクチュアリティ
4. 坂本博（東京）セルゲイ・プラトノフの本におけるプレハーノフの書き込みについて
5. O.K.ツァピーエヴァ（マハチカラ）プレハーノフの経済理論の進化
6. ウェイ・シャオピン（北京）プレハーノフの史的唯物論
7. Л.Д.シロコラート（ペテルブルグ）プレハーノフとマルクス労働価値説および限界効用説の相関関係の問題
8. チャン・リマン（北京）プレハーノフの史的唯物論の貢献と現代中国における調和のとれた社会の建設
9. S.H.バロン（チャベル・ヒル）プレハーノフと東洋的専制主義の概念
10. スー・シュプア（北京）中国におけるプレハーノフ
11. 相田利雄（東京）日本における経済発展と社会運動
12. H.R.ペーター（ハレ）プレハーノフとダン：党機関誌『社会民主主義者の声』創刊期における共同行動の経験
13. E.ジアンニ（ジェノア）A.ラブリオーラとプレハーノフ：二人のマルクス主義の先駆者の、平行した、異なる、そして類似の生涯
14. T.M.スミルノーヴァ（ペテルブルグ）現代ロシアにおける愛国主義の問題

12月12日

1. И.Т.シャトーヒン（ベルゴロド）20世紀初頭の高級官僚と国会：対立から協力へ
2. С.И.ポトーロフ（ペテルブルグ）19世紀末-20世紀初頭の労働運動
3. П.Ю.サヴェーリエフ（モスクワ）「労働解放」団と「ロシア社会民主主義者同盟」：社会民主主義サークルから党への移行の諸問題
4. B.H.スイチコフ（ペテルブルグ）「労働解放」団の本部とロシアとの連絡の再開
5. И.А.ヴェルバ（モスクワ）プレハーノフの最後の日々
6. A.B.ブズガーリン（モスクワ）現代の社会・哲学問題の解決に対するポスト・ソビエト時代のマルクス主義の科学的寄与
7. S.マツァス（アテネ）プレハーノフのマルクス主義とレーニンの弁証法：アクチュアルな議論
8. H.A.コソラーポフ（モスクワ）21世紀のマルクス主義：中道オルターナティブ再考に向けて